

マニュアル作成支援システムの統一機能

1J-2

勘座浩幸 空閑茂起

シャープ(株) 情報システム研究所

1 はじめに

われわれは正確でわかりやすいマニュアル作りを援助するマニュアル作成支援システムを開発している[1][2]。このシステムにはマニュアル作成に必要な一連の作業を支援する機能がある。今回は、ライターの文書作成作業を支援する機能について報告する。

大量ページのマニュアルのライティングには、複数のライターが分担して作業することが多い。このとき問題になるのは、文書形式や用語の一貫性である。文書形式や用語に一貫性がないと、読者は混乱する。本システムでは、あらかじめ決めた文書形式や用語に統一できるため、ライターはさほど意識しなくても、一貫性のある文章を作ることができる。以下、文書形式と用語を統一するためにシステムが支援する機能について述べる。

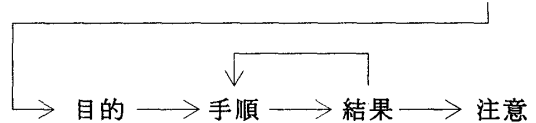
2 文書形式の一貫性

2.1 文書形式

一般のマニュアルの中でも、リファレンスマニュアルなどでは、それぞれの章や節の文書の書き方は、普通同じ形式で統一する。特に、複数のライターが分担して執筆する場合は、形式をあらかじめ決めておくことが必要となる。各章や節の形式が決まっていないうマニュアルは、読者にとって非常に読みづらい。また、機能を説明するときには、目的を先に述べて方法を述べるといった『説明・指示型』の文書がわかりやすいとされている。本システムでは、利用者が決めた形式に沿った文書作成ができる。例えば、各節における文書の記述順序を次のような形式に決めるとする。

文書形式の例

機能名 → 目的(要約) → 語句の説明



エディタ上のガイダンス領域にこれから書くべき文の文種情報(「機能名」、「目的」など)が表示され、ライターはそれにしたがって文書を作成する。現在書いている内容を書き終えると、ガイダンス表示が次の文種情報に変わる。このように、ライターは今何について書くのかを確認しながら文書を作成することができる。

2.2 文種情報の利用

ガイダンスに従って入力した文書は、文種情報と共に保存される。文種情報により文を内容で分類でき、様々な処理に利用できる。よって、この機能は文書作成を支援する以外にも、文種情報が得られるという点で、利用価値がある。文種情報を利用すると次のような処理ができる。

- 必要な情報だけを取り出して一覧表を作る。例えば、文書形式の例の文種情報のうち語句の説明だけを集めると用語集、機能名と目的(要約)を集めると機能一覧表が得られる。
- 語句の説明などを除き、新しい文種情報を入れることで初心者対象のマニュアルを専門家向けに変えることができる。

Consistent Functions in Manual System

Hiroyuki KANZA, Shigeki KUGA

Information Systems Laboratories, SHARP Corp.

2. 3 文管理機構

これらの処理が実現できるよう、本システムのエディタは、文種情報などの文に関する情報により、文を表示・非表示の切り替えができる。文に関する情報は、文管理要素に書かれており、すべての文は、対応する文管理要素をもっている(図1)。文管理要素には他に、前後文や親・兄弟・子の文へのポイントなどの情報がある。これらの情報をもとに、エディタ上の文の表示・非表示を切り替える。前述の例のほかにも、アウトラインプロセッサのような章レベルの項目の表示ということもできる。

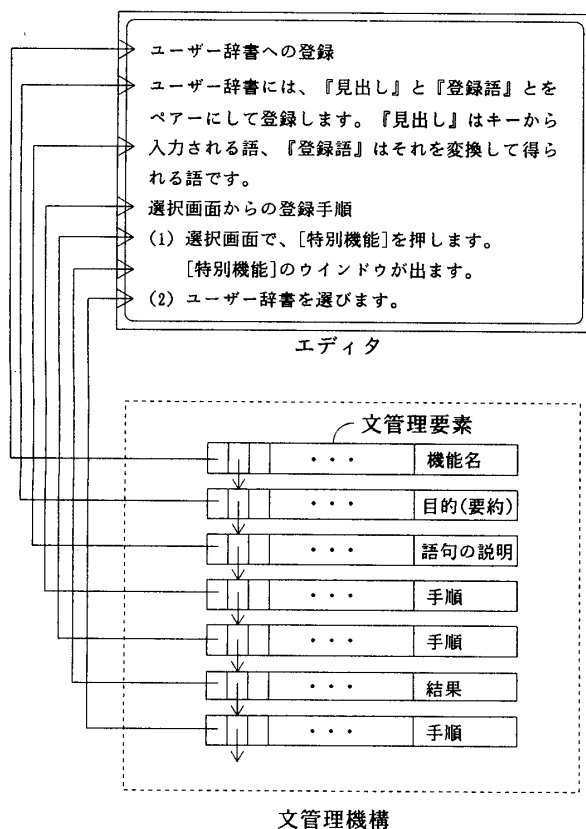


図1 文管理機構

3. 用語・表現の一貫性

用語の一貫性のチェックには校正機能[3]を利用する。マニュアル中で使う主な用語は、あらかじめライターの間で決め、登録しておく。カタカナ表記の長音符号を付けるか付けないかの選択もできる。ライターが書き上げた文書を校正機能にかけ、誤字・脱字等のチェックと同時に、不統一な用語をみつけたし正しい用語に変換する。

用語以外に表現も統一する必要がある。例えば、『です・ます調』で記述するとか、受け身・二重否定は使わないようにするなどがそうである。校正機能を使えばこのようなチェックもできる。

4. おわりに

ここでは述べなかったが、本システムの特徴の一つに、過去に作成した文書を構造的に保存し、新しいマニュアル作りに再利用できる機能がある。過去に作成したマニュアルは、本システム以外のワープロ等で作られ保存されているものが多い。これらの文書を本システムで利用するには、前述した文種情報を各文に付けなければならない。利用者が一つ一つの文に対し、文種情報を入力するのは大変な作業であるため、これをシステムが自動的に割り付けることが望ましい。一つの方法として、校正機能の言語解析処理を利用することが考えられる。

[参考文献]

- [1] 勘座，空閑：「マニュアル作成支援システムの機能」，情報処理学会第36回全国大会，5U-4.
- [2] 空閑茂起：「マニュアル作成支援システム ROMAN」，情報処理学会第35回全国大会，7T-3.
- [3] 空閑茂起：「文書作成・校正支援システムWISE」，電子通信学会，0S86-28，1986.
- [4] 高橋昭男：「わかりやすいマニュアルの作成法」，日経マグローヒル社，1985.